

連	載	
講	座	
第	4	回

洪水防止に臨機応変

一石田光成一

作家 堂 門 冬 二

豊臣秀吉が一城のあるじになったのは、近江国(滋賀県)長浜城においてだった。それまでこの地域は今浜とっていた。それを秀吉は主人織田信長の名にちなんで長浜に変えたのである。同時にかれはそれまで木下とっていた姓を羽柴に変えた。したがって長浜城時代はかれにとって非常に思い入れが深い。このころの秀吉はすでに主人信長から教えられた

「これからの大名は経営感覚がなければダメだ。国を治めるのにはソロバン勘定も大切だ」

ということを守っていた。そこで採用したのが石田三成である。三成は近江感覚そのものといってよいほど経営の考えが鋭く、またソロバン勘定も得意だった。もともと秀吉に会ったときは長浜城近くの小さな寺の小坊主だった。地域を歩きまわっていた秀吉は喉が渇いてその寺に寄った。そして「茶をくれ」といった。このとき出てきたのが三成で、佐吉と名のっていた。はじめは大きな井にぬるい茶を一杯入れてきた。秀吉は飲み干した。そして「もう一杯」といった。三成は今度は少し小さめの器にやや熱い茶を入れて持ってきた。飲んだ秀吉は思わず三成の顔を見た。そして(この小坊主は賢い)と思った。そこで試しに「もう一杯」というと、今度はごく小さい器に熱い茶を入れて持ってきた。秀吉は感心した。そこで寺の住職に交渉して三成を貰い受け自分の家来にした。秀吉にすれば(この小坊主は近江人らしい経済感覚を持っている。将来おれの役に立つだろう)と思ったからである。そのとおりだった。

秀吉がどんどん出世し、やがて天下人になり大坂城を築いた。城ができあがって間もなく雨期に入って、近くを流れる淀川の堤が決壊し大洪水になった。民思いの秀吉は工事奉行を呼んですぐ堤の決壊を防ぐ工事をおこなえと命じた。が、音を立てて流れる淀川をみて工事奉行はビビった。そこで秀吉は三成に「代わっておまえがやれ」と命じた。三成は承知した。

しかしこのとき三成は秀吉にこんなことを頼んだ。

「お城の米蔵から米俵をお借りしようございますが」「米俵をなんにするのだ?」「住民にいまから土俵をつくれといっても時間がありません。そこで米俵をかわりに使います」

まわりにいた家臣たちは思わず顔を見あわせた。そして、(大切な米俵を土俵のかわりに使うなどというのは、あいつはバカではないのか?)

と眼と眼で語り合った。ところが秀吉は「面白い、米俵を貸してやる。必要なだけ持っていけ」と応じた。三成は家来に命じて、米俵をどんどん淀川の決壊場所に運ばせた。そしてこれを積んだ。川の水はせき止められた。住民たちはよろこんだ。すると三成は住民たちにこういった。

「丈夫な土俵をつくって持ってこい。土俵一俵と米俵一俵を交換してやる」

住民たちは思わず顔を見合わせた。そして「ウソだ。そんなことができるわけがない。あんなうまいことをいって、おれたちを騙す気だ」とささやき合った。これをきいた三成は、「うそではない。濡れてはいるが、乾かせば米の飯が食えるはずだ。おれを信じて、どんどん土俵をつくってこい」ともう一度いった。半分は疑いながらも住民たちはやはり地域を守る意味もあるので、次々と土俵をつくって持ってきた。三成は約束どおり土俵一俵と米俵一俵を交換した。しかし土俵のつくり方がいい加減で、役に立たないようなものはすぐつき返した。「つくり直してこい」と命じた。

ほんとうに米俵がもらえたので、住民たちは三成に感謝した。ところが三成はこう告げた。

「この米俵と土俵との交換はおれの考えではない。あの城(大坂城)におられるご城主の羽柴秀吉様がお命じになったことだ。礼をいうなら、城にいった羽柴様にいえ」

住民たちは三成にいわれたとおりにした。大坂城にいった秀吉に面会を求め、

「このたびはほんとうにありがとうございました。ご才覚によって、米俵で水が防げただけでなく、われわれのつくった土俵と米俵を換えてくださいました。ご恩は忘れません」

と告げた。なんにも知らない秀吉は眼を丸くした。しかしすぐ秀吉も、

(三成の才覚だな)

と感じた。三成は自分を発見してくれた秀吉に恩を感じていた。だから忠誠心が強い。そのために、

(どんな苦勞をしても、得た功績はすべて秀吉公に捧げよう)

と思っていたのである。その忠誠心は秀吉にも伝わった。秀吉と三成はまさに“あ・うん(あは吐く息、うんは吸う息)”の呼吸がピッタリ合う主従であった。